

連載第 17 回

邪馬台国の時代⑫

～日田をゆく～

河村哲夫

日田郡

この連載は、不弥国(宇美)をスタートし、御笠郡から夜須郡、そして朝倉郡からさらに東の日田に向かって進んでいる。その間の距離をあらためて示せば、次のとおりとなる。

宇美八幡宮 (不弥国)	竈門神社 (御笠郡)	甘木 (夜須郡)	恵蘇八幡 (朝倉郡)	日田市 (豊後国)
区間距離	6 km	15 km	11 km	19 km
累計距離	6 km	21 km	32 km	51 km

御笠郡の山家(筑紫野市)から大分県の日田市まで約 40 キロ。ほぼマラソンの距離である。

日田は、日高(『和名抄』)あるいは比多(『先代旧事本紀』)とも書かれた。「hi-ta」と発音する。

『豊後国風土記』には、この地方に久(hi-sa)津媛なる女酋がいたと書かれているから、根源的にいえば、「hi-tsa」というような発音であったのだろう。



江戸時代の日田往還

江戸時代、幕府の直轄地——天領となった日田を中心に、下図のとおり日田往還が整備された。西は筑前・筑後・肥後の3か国、東は豊前・豊後の2か国に道が通じている。

逆にいえば、幕府はこのような日田の交通面における特質を踏まえて、九州を統治するための日田郡代を設置したともいえる。



近代日本の成長を支えた鉄道——日田英彦山線

この性格は、明治維新以降の近代日本の時代においても変わらない。

日田の砂利、砕石や木材、平尾台(北九州市)・香春岳(田川郡香春町)の石灰石、添田・田川の石炭などの運搬のため、1915年(大正4)夜明駅(日田市)と城野駅(北九州市小倉南区)を結ぶ日田彦山線が整備され、北九州工業地帯の発展を支える重要な鉄道路線となった。

しかしながら、戦後の石炭産業の衰退や過疎化・少子高齢化の進展などにより、赤字路線に転落し、とどめを打つように、2017年(平成29)7月九州北部豪雨に襲われて壊滅的な被害を受けた。

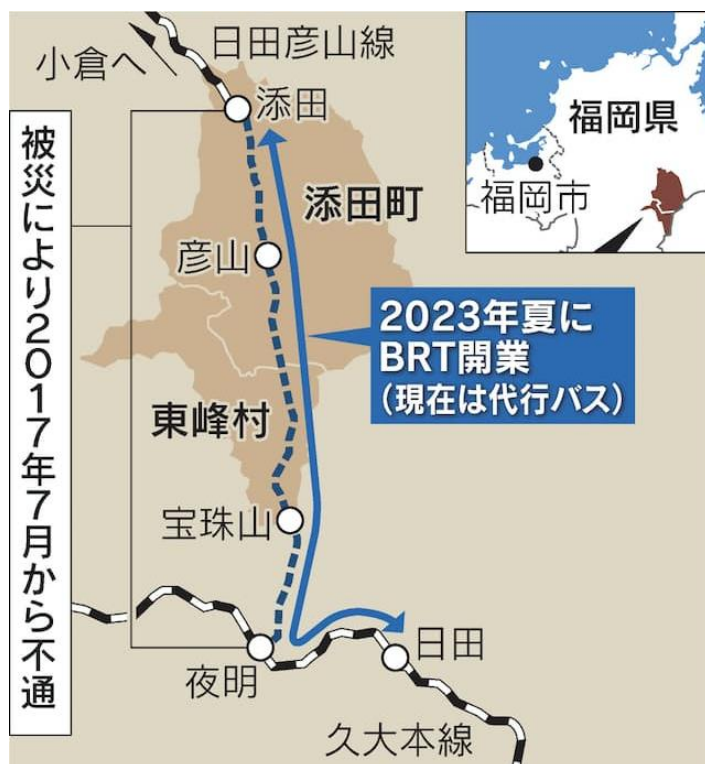
夜明駅—添田駅間が不通となり、代替バスで運行が再開されたものの、路線廃止も含めたさまざまな議論が行われ、最終的にJR九州と関係自治体との合意が整い、バス高速輸送システム(BRT)の導入などによって路線の存続が図られることとなった。

ずっと先のほうで紹介することになるが、日田彦山線沿線は日本の古代史を語るうえで、きわめて重要な地域である。

しかも、日田彦山線が通じているということは、地形的に田川・遠賀川流域とつながっているということである。古代人がこの通路を利用しないはずがない。

そういう意味で、筑紫平野を拠点とした邪馬台国が次なるステップに飛躍したそのカギを握っているのが、日田英彦山線のルートなのである。

この連載は、順を追ってゆっくりと進んでいくので、今の段階で一足飛びにその話を書けないのがなんとももどかしい。どうかご健康に留意され、楽しみにお待ちしております。

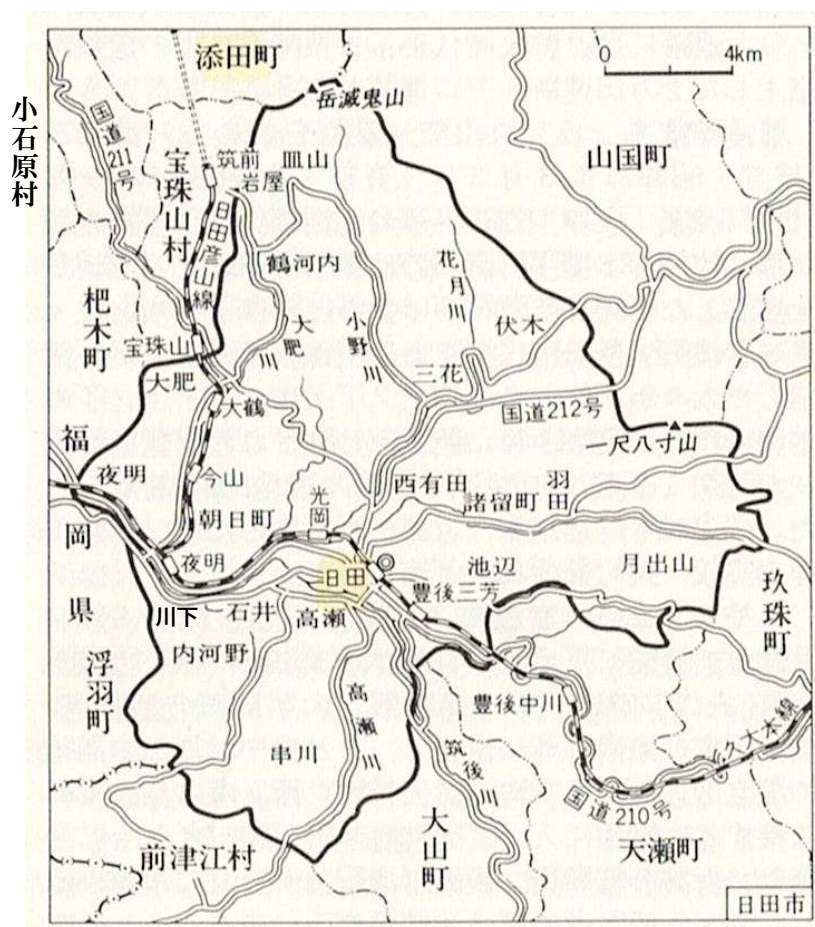


交通の要衝としての日田

下図は平成の大合併前の日田市の地図である。

日田市の北側に下毛郡の山国町(現・大分県中津市)があり、東に玖珠郡の玖珠町(大分県)がある。西側は福岡県で、筑後川の南に浮羽町(現・うきは市)、筑後川の北に杷木町(現・朝倉市)および宝珠山村(現・朝倉郡東峰村)・小石原村(現・朝倉郡東峰村)・田川郡添田町がある。

なお、南部の大山町・天瀬町・前津江村・中津江村・上津江村の2町3村(いずれも旧日田郡)は、現在では日田市に編入されている。



合併後	合併前
日田市	日田市・大山町・天瀬町・前津江村・中津江村・上津江村



現・日田市(日田郡)と隣接市町村

福岡県		熊本県		大分県	
筑後	八女市(八女郡)	肥後	山鹿市(山鹿郡)	豊後	日田市(日田郡)
筑後	うきは市(浮羽郡)	肥後	菊池市(菊池郡)	豊前	中津市(下毛郡)
筑前	朝倉市(朝倉郡)	肥後	阿蘇市(阿蘇郡)	豊後	玖珠町(玖珠郡)
筑前	東峰村(朝倉郡)	肥後	南小国町(阿蘇郡)	豊後	九重町(玖珠郡)
豊前	添田町(田川郡)	肥後	小国町(阿蘇郡)	豊後	竹田市(直入郡)

日田盆地の古代遺跡

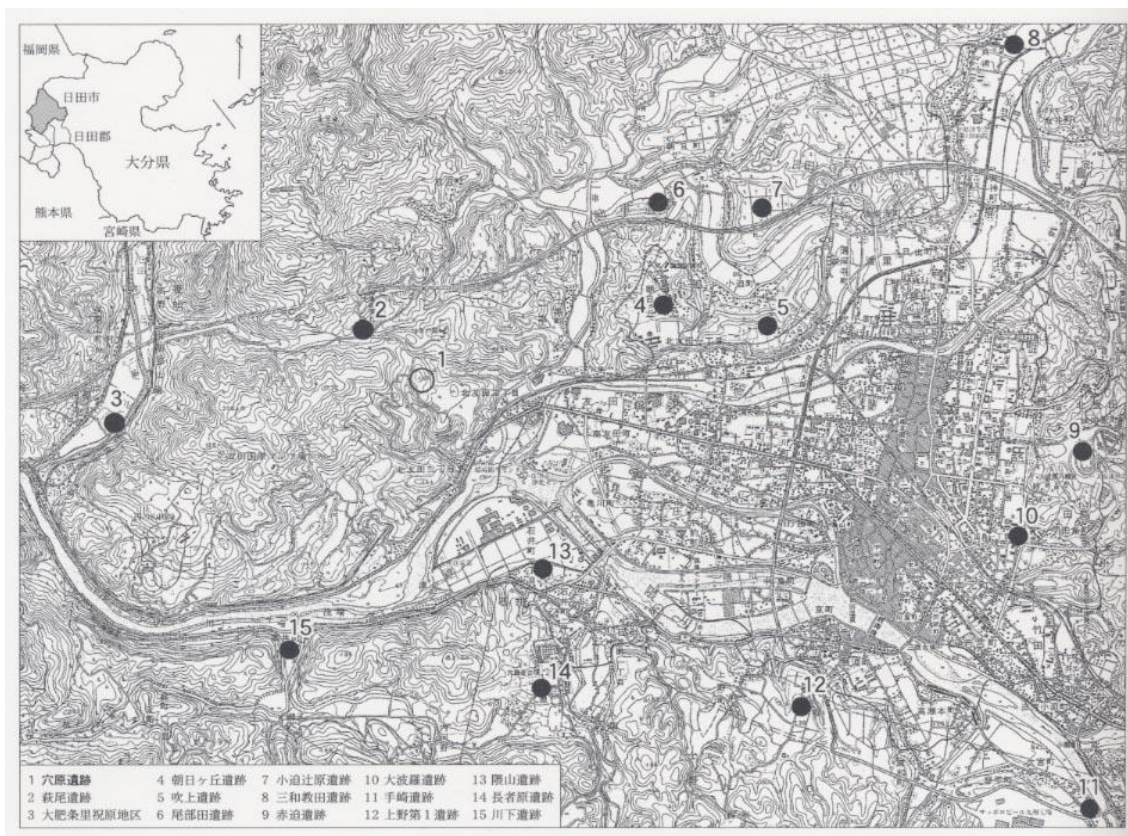
日田市の中心部ともいえる日田盆地からは、旧石器(先土器)・縄文・弥生・古墳時代に至る各時代の遺跡が重層的に確認されている。

最も古い時代の遺物は、うきは市に隣接した内河野地区の旧石器(先土器)時代の尖頭器とされる。

また、下記のとおり、縄文遺跡も豊かである。

日田盆地における主要な縄文遺跡

時期	遺跡名	出土物等
縄文時代早期	長者原遺跡(14)	押型文土器
	大部遺跡・石ヶ迫遺跡・上野第1遺跡(12)	集石遺構
縄文時代前期	大肥条里下河内地区	集石遺構・土坑
縄文時代後期	川下遺跡(15)	土器包含層
	手崎遺跡(11)	西平式期
	葛原遺跡	三万田式期
	尾部田遺跡(6)・求来里平島遺跡C地区	御領式・大石式の竪穴住居
	大肥条里祝原地区(3)	集石遺構・土坑
	大肥条里吉竹地区	土坑
	牧原遺跡・三和教田遺跡C地点(8)	土偶
	隈山遺跡(13)	
縄文時代晩期	森ノ元遺跡	前半代の埋嚢
	石ヶ迫遺跡・有田塚ヶ原遺跡	陥穴遺構
	赤迫遺跡(9)	包含層

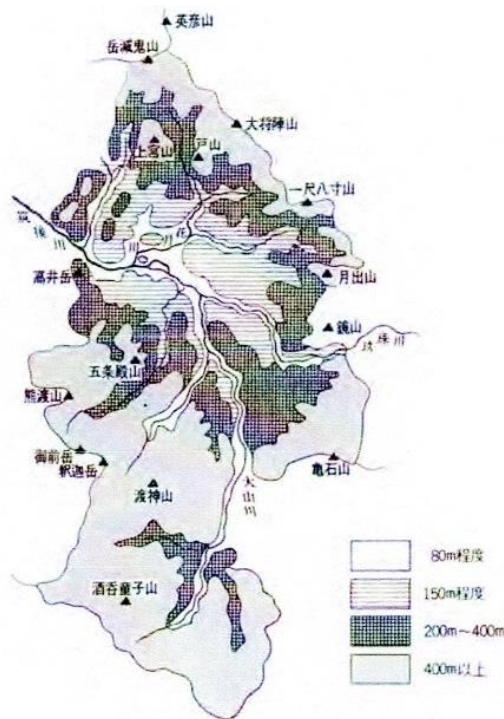


弥生時代のはじまり

日田における稲作の開始時期については、弥生前期前半に位置づけられる板付Ⅰ式土器の発見はなく、それに続く板付Ⅱ式土器が出土していることから、弥生時代前期後半ごろ伝播したとみられている。そのルートも福岡平野から甘木朝倉方面を経由するルート、および筑後川沿いに伝搬していたとされる。そして、日田からは玖珠川域に天瀬町さらには玖珠盆地に伝搬していったとみられている。

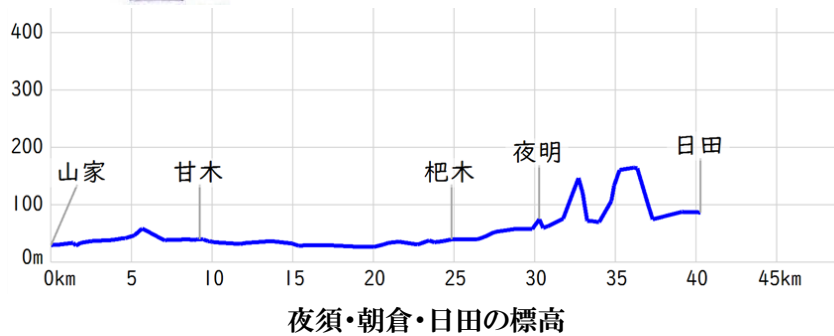
日田盆地を貫流する筑後川

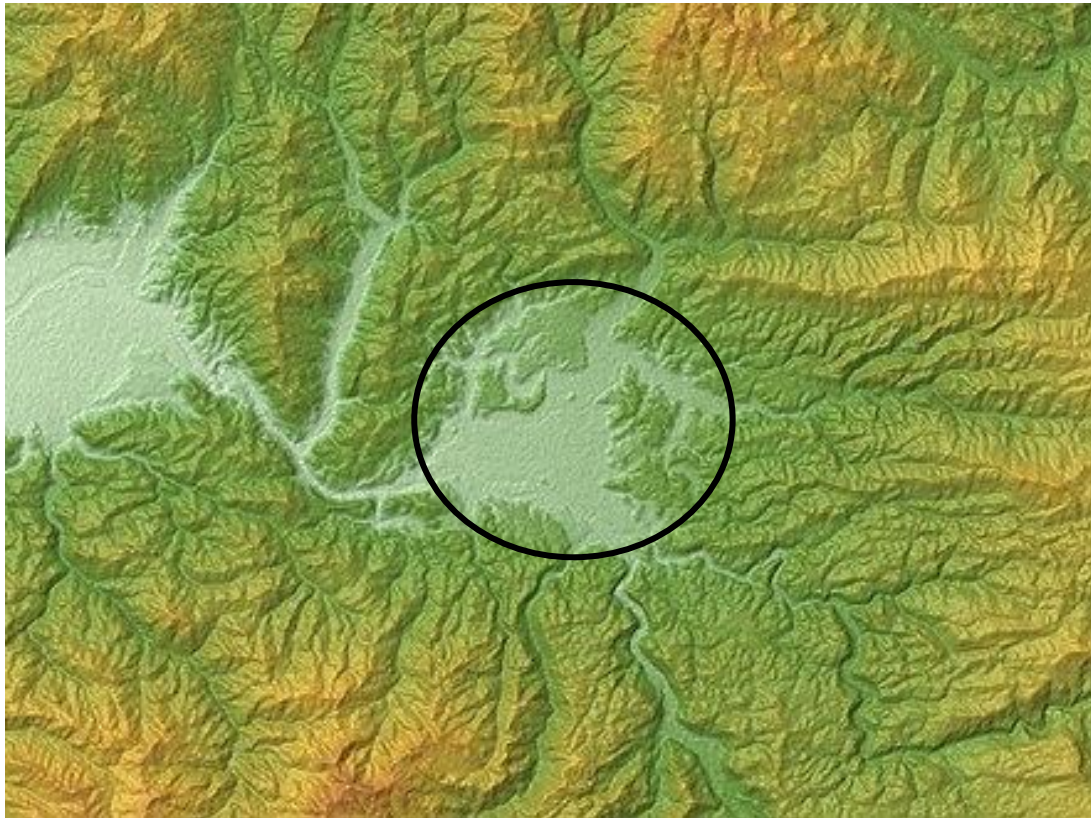
日田盆地を東西に筑後川(三隈川)が貫流している。ということは、常に洪水の危険にさらされているということである。安全に暮らすには、丘陵地や高台に住むしかない。



したがって、日田盆地の縄文・弥生時代を含めた古代遺跡は、筑後川よりも約 40メートル以上高い場所——標高でいえば、120～170メートルの丘陵地から見つかるケースがほとんどである。

上図でいえば、ほぼ  150m の区域である。





日田盆地

日田盆地の主要な弥生遺跡

【朝日・山田地域】

(1)吹上(ふきあげ)遺跡(日田市大字渡里字吹上原)



日田盆地北部——花月(はなつき)川と二串川にはさまれた標高 140 メートルの吹上原台地にある遺跡である。

台地のまわりは、川の浸食により高さ 50 メートルほどの崖地となっているが、日田盆地が一望できる絶好の場所となっている。

古くから土器片、石器が多数出土することで知られていた。

竪穴式住居跡や貯蔵穴、溝状遺構、小児用カメ棺墓のほか、弥生前期後半ごろの板付Ⅱ式土器や弥生中期初めの城ノ越式土器や須玖Ⅰ、Ⅱ式土器など、弥生時代の土器類が出土し、石器についても、福岡市今山遺跡産の石斧や飯塚市の立岩遺跡産の石包丁などが出土し、福岡地方および嘉麻地方ときわめて密接な関係を有するクニとその首長(王)の存在を強く示唆していた。

そして、平成 7 年(1995)9 月、青銅器を伴う中期後半の大型カメ棺が 7 基発掘され、このうち 4 号カメ棺からは右手に 15 個のゴホウラ貝の腕輪をした成人男性の人骨が出土した。



棺内からは水銀朱と 480 個以上の大量のガラス玉、ヒスイの勾玉、中細銅戈、鉄剣なども出土した。まさしく日田の王墓であった。

さらに 5 号カメ棺からは両手にイモ貝の腕輪をつけた女性の人骨も出土した。女王の墓である。

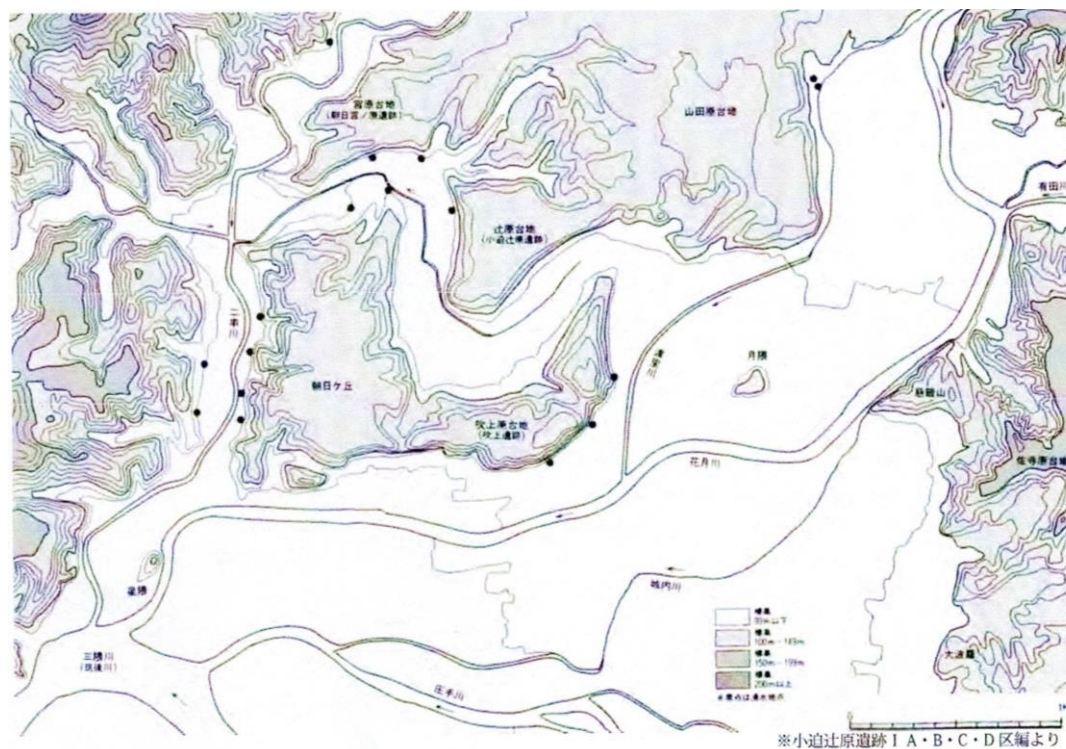
銅戈



ヒスイの勾玉



(2)小迫辻原(おごこつじばる)遺跡(日田市小迫)



第 8 図 小迫辻原遺跡周辺地形図と湧水点 (1/30,000)

朝日川をはさんだ吹上遺跡北方の高さ約 40 メートル(標高約 120 メートル)の辻原台地にある。旧石器(先土器)時代から縄文・弥生～中世までの複合遺跡で、九州横断道路建設に伴い昭和 60 年(1985)から発掘調査が行われ、昭和 62 年(1987)に 3 世紀末～4 世紀初頭——すなわち、弥生時代終末期～古墳時代前期とみられる 3 棟の居館跡が発見され全国的に注目を浴びた。





現況図 (S=1:5,000)

• 1号居館

東側に位置し、一辺約 47 メートルの環濠に囲まれた区域内に 3 間×2 間以上の大きさを有する総柱建物 1 棟が確認されている。王(首長)クラスの住居とみられている。

• 2号居館

西側に位置し、東西約 37 メートル、南北約 36 メートルの方形の環濠を有し、その内側に 3 間×2 間の総柱建物が南北に 2 棟並んで確認されている。環濠居館跡が 2 基並んで発掘された例は日本ではほかにない。祭祀儀礼をおこなうための施設ではないかと考えられている。

• 3号居館

1, 2 号居館から少し離れた場所にあり、一辺約 20 メートルの濠の内側に 3 間×2 間の建物 1 棟が確認されている。

なお、弥生時代前期後半から中期初めの円形竪穴式住居跡、貯蔵穴、土坑が検出され、弥生中期後半から末の成人用カメ棺墓、小児用カメ棺墓、土壙墓などが検出されている。

土壙墓からは石剣の刃先が出土し、板付Ⅱ式、城ノ越式、須玖式土器などの土器類のほか、石包丁、柱状片刃石斧、太形蛤刃石斧などの石器も出土している。

弥生時代の早い時期から人が住み着き、その後、弥生終末期までの長期にわたって支配者層の拠点集落として安定的に継続していたことをしめしている。

小迫辻原遺跡

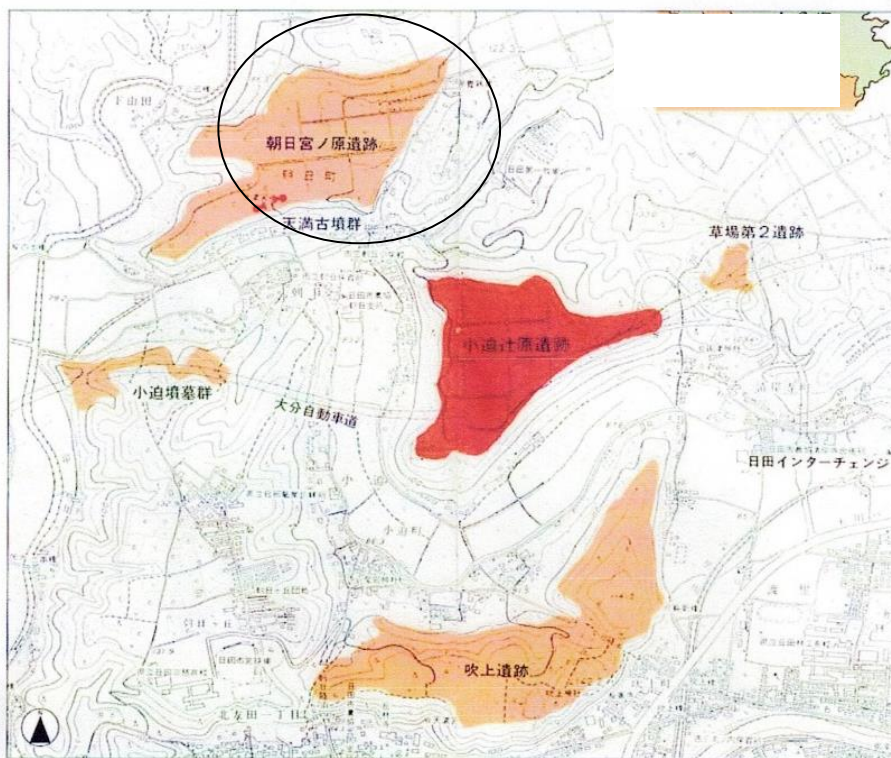
遺跡は標高約一二〇mの通称辻原の台地上にあり、これまで一〇年間におよび発掘調査で旧石器時代から近世までの遺構や遺物が多数出土している。

なかでも台地の東側では東西に並ぶ古墳時代前期（四世紀）の三基の居館跡が発見されている。いずれも濠を方形に巡らせ、その内側に柵状の施設や建物を計画的に配置している。各居館跡の規模は、一号が一边約四十七m、二号が一边約三十八m、三号が一边約二〇mである。また、台地の西側には居館跡と前後する時期の三基の環濠集落が存在し、台地の下にある湧水地に近い場所につくられている。環濠は形を不定形から方形へと変化させながら発展している。竪穴住居が環濠の内と外に存在することから、そこに身分的違いが生じたことがわかる。三基の居館跡と環濠集落は互いに密接な関係にあり、我が国の成立を知るうえで重要である。

このほか、古代（八世紀頃）の整然と配置された七棟の榎立柱建物群の確認と、「大領」と読める墨書土器の出土や、中世（一二世紀～一六世紀）の建物などを濠や柵で囲む屋敷跡などが発見されている。

日田市教育委員会

(3)朝日宮ノ原(あさひみやのぼる)遺跡



小迫辻原遺跡の北西600メートルの宮ノ原台地にある。宮ノ原は天神原(てんじんぼる)とも呼ばれるため、天神原遺跡と呼ばれることもある。

弥生中期の竪穴式住居跡15基(円形3基、方形12基)、土壙200基、小児用カメ棺4基などが発見されている。円形の竪穴式住居は直径8～9メートルの大形である。

土器は城ノ越、須玖Ⅰ・Ⅱ式が主流で、弥生中期末～後期初めの3号方形竪穴式住居

跡からは、鋤先口縁の頸部、胴部に多条の突帯を巡らす壺や丹塗り須玖式甕など豊前地域に見られる土器が出土した。また、輝緑凝灰岩や砂岩の石包丁、磨製石鏃、太形蛤刃石斧、抉入片刃石斧、投弾なども出土している。

なお、宮ノ原台地南部の山林と天満社境内には 2 基の前方後円墳——天満古墳群(朝日天神山古墳)がある。

1 号墳は、全長 33 メートル。後円部の直径約 20 メートル、高さ約 4 メートル、前方部の長さ約 13 メートル、幅約 16 メートル、高さ約 3 メートルの前方後円墳である。周囲には一重の周溝が確認されている。

1928 年(昭和 3 年)に天満社の社殿が建設された際に、仿製の変形五獣鏡、鉄刀、貝製雲珠、鏡板、杏葉、辻金具などの馬具、須恵器、土師器が出土したほか、水晶製三輪玉が発見されている。水晶製三輪玉は、継体天皇陵に比定されている今城塚古墳などから発見され、九州では数例の出土があるのみであり、被葬者の社会的地位の高さを示すものと考えられている。

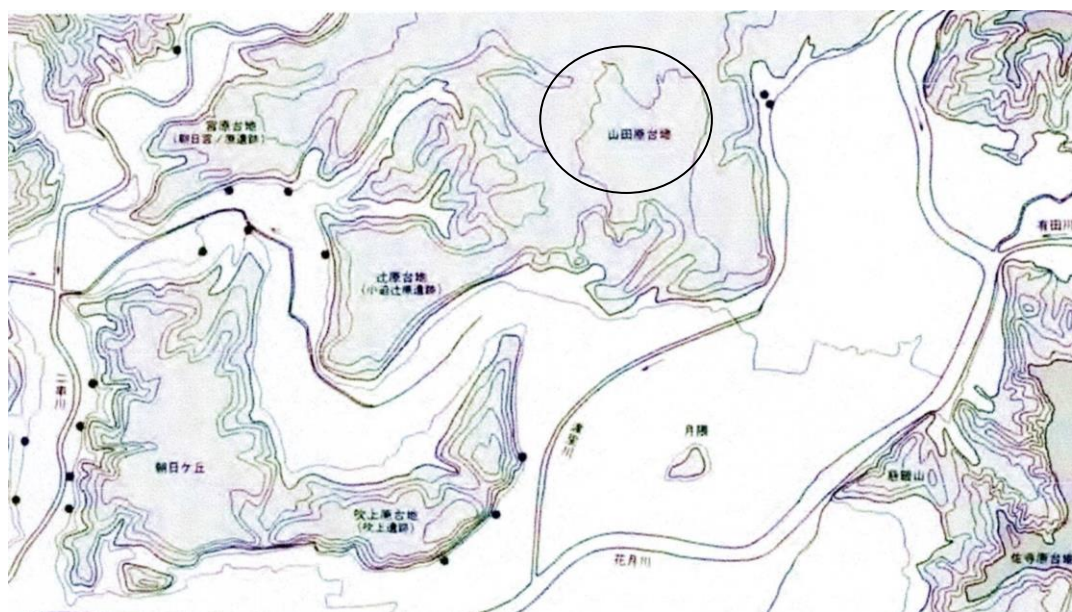
1 号墳は、その出土品から 2 号墳(6 世紀前半築造)に続く時代に築造されたものと推定されている。

2 号墳は、全長 63 メートルで、後円部の直径約 36 メートル、高さ約 5 メートル、前方部の長さ約 27 メートル、幅約 38 メートル、高さ約 6 メートルの前方後円墳である。墳丘の損傷が著しいが、周囲には二重の周溝が確認されている。日田・玖珠地方最大の前方後円墳であり、大分県内の古墳時代後期の古墳でも最大級のものである。

内部は未調査であるが、1997 年からの調査で、周溝から環状把手付き横瓶、大型平底須恵器が出土している。須恵器は埴輪の代用の埴輪壺と考えられ、さきたま古墳群の中の山古墳などで類例が見られる希少な遺物である。

2 号墳は、その出土品から、6 世紀前半に築造されたものと推定されている。

(4)山田原(やまだばる)遺跡



山田原台地東側に位置する。農業基盤整備事業により大半破壊され畑の中に土器片が多数散布している。板付Ⅱ式の甕や、須玖式土器の壺、丹塗りの土器片、立岩産の石包丁等があり本格的調査はされていない。

(5)岩崎遺跡

朝日宮ノ原遺跡北側の二串川流域沿いに存在する。昭和58年発見されたが調査は行われていない。縄文土器や須恵器に混じて、弥生中期の壺の破片が確認されている。

(6)徳瀬(とくぜ)遺跡

筑後川と庄手川が合流する微高地上に存在し、昭和 59 年に発見、60年試掘の結果、溝状の遺構の一部と竪穴式住居跡の存在を確認。板付Ⅱ式、城ノ越式、須玖式土器、立岩産石包丁などが出土した。

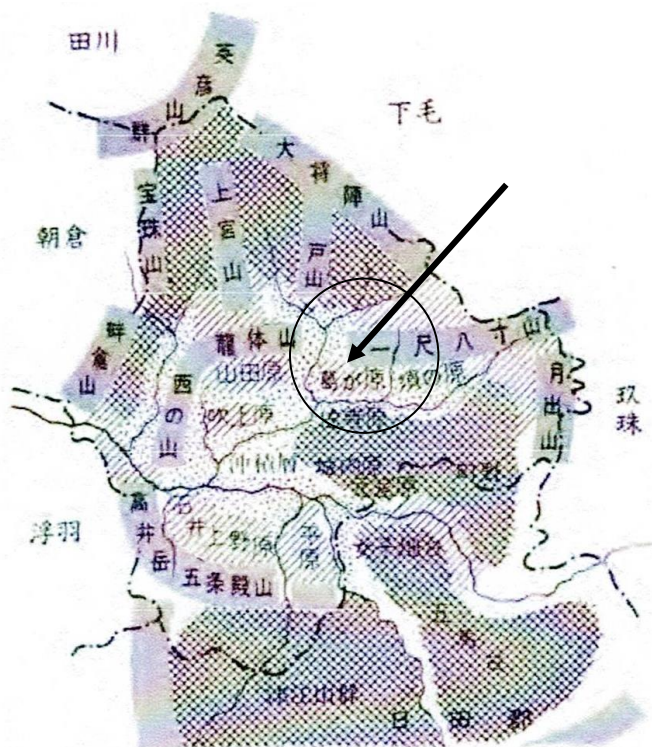
【有田地域】

(1)小寒水(おそうず)遺跡

有田川右岸の小寒水原台地先端部に位置している。本格調査はされていないが、発見された土器の中には甕の上げ底の低部等があり弥生中期初めの集落が営まれていたとみられている。

(2)葛原(くずばる)遺跡

西に花月川、南に有田川を望む葛ヶ原台地の上に存在する。この遺跡の北側には黒耀石の石器が採集され、旧石器・縄文時代の柴尾遺跡がある。土壌40基が発見され、遺物は城ノ越土器を主体としており、弥生中期初めに位置づけられている。



日田盆地周辺の主な山群と原(段丘)

(3)佐寺原(さでらばる)遺跡

葛原遺跡の南側台地に位置し、主に弥生中期の土器が出土している。

【三芳・田島地域】

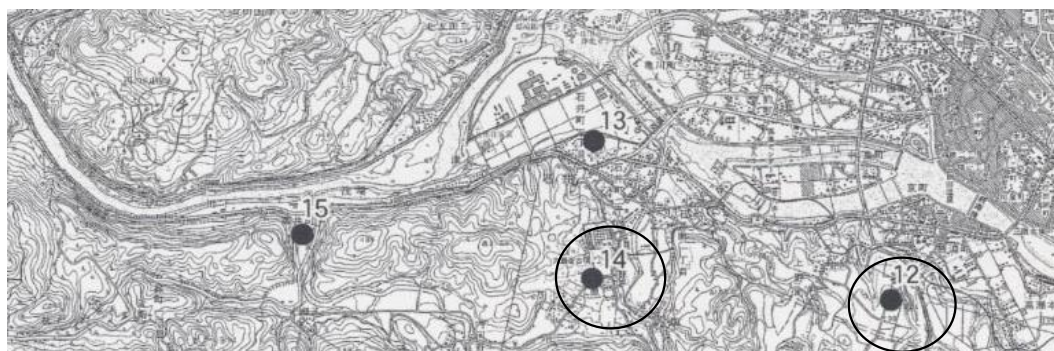
(1)元宮原(もとみやばる)遺跡

元宮原台地に位置し中期の土器が採集されている。

(2)溝口遺跡

河岸段丘上に存在し弥生中期の壺の破片が発見されている。

【石井・上野・高瀬地区】



長者原遺跡

上野原遺跡

(1)長者原遺跡

別名原(はる)遺跡、原台地に存在し各時代の遺物が多数採集されている。

(2)上野原(うえのぼる)遺跡

上野原台地に存在し、弥生中期後半の土器が採集されている。現在ほとんどが水田として利用されている。

(3)泉遺跡

上野原と護願寺遺跡の中間に位置する。土師器等に混じって、板付Ⅱ式、須玖Ⅰ式の甕のかけらが発見されているが本格調査はされていない。

(4)若八幡神社遺跡

筑後川河岸段丘上にあり現在畑地となっている。石包丁が発見されている。

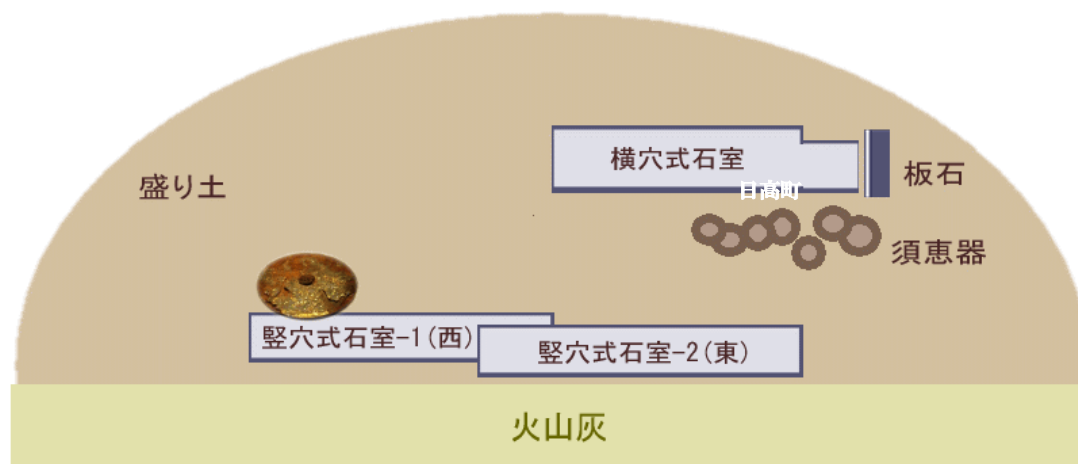
以上、日田盆地における弥生時代の主要な遺跡について紹介したが、朝倉地域とおなじく、これらの遺跡からは「親魏倭王」の金印など、卑弥呼や邪馬台国と直接結びつく遺物や文書など、決定的な資料は出土していないというべきであろう。

とはいえ、吹上遺跡と小迫辻原遺跡の存在はきわめて重要である。

吹上遺跡が紀元前2世紀ごろから勃興し、やがて北部九州の盟主となった奴国の影響を大きく受けた日田地域の王墓であるとすれば、小迫辻原遺跡は邪馬台国時代の終末期と重なる拠点集落遺跡である。卑弥呼を継いだ女王台与の活躍時期と重なり、神武東遷・大和政権の勃興期とも重なる日田地域の支配者(王)の居館跡である。——彼らはいったい何者なのか。

梅原氏は 1963 年(昭和 38)、九州大学の岡崎敬氏とともに日田を訪れ、発見者で地主の渡辺音吉氏から聞き取り調査を行ない、三芳駅東方約 450 メートルのダンワラ台地裾に存在した竪穴式石郭を主体としたダンワラ古墳(日田市日高町・東寺 1933 年消滅)から出土したものと結論づけた。

ダンワラ古墳



天領日田資料館(日田市豆田町)

1963 年(昭和 38)、梅原末治氏は美術研究誌『国華』(853 号)に「豊後日田出土の漢金銀錯嵌珠竜紋鉄鏡」という論文を掲載した。

昭和 8 年(1933)に此の鏡の見出された地は、大分県(豊後)日田市日高町小字東寺の俗に「ダンワラ」と呼んでいる、国鉄久大線三芳駅の東方約四百メートルのところである。そこは高い丘陵性の台地の西の裾で、発見者たる渡辺音吉氏の居宅の背後の一隅に当って、現在削り取られてやや崖状を呈し、上辺に三、四の横穴の遺存する部分に沿うて、いまは菜園となつてある。幅六メートルに近い右の地区は鉄道工事の為に五メートル程も採土されたところで、その際にたまたま見出されたのであった。

実地に就いて渡辺氏から様子を聴き糺(ただ)すと、当時既に表面に墳丘など全く認められなかったが、もとの地表からかなり下(現在の地面よりやや上位)に南北の方向から三十度東に偏位した細長い区画の形迹が約八メートルを距てて相並んでいて、鏡はその西の一方に遺存したと言う。

その状況も氏が古物に興味を持って、工事の際自からその顕出に従うたのでほぼ知られるのである。即ち長さ四・五メートルもあつたらうと言う細長いこの部分は、周囲とやや土質が違つて、自から所謂古式古墳(竪穴式)の主体たることを示すもので、鏡はその西辺に近く完形を保つて遺存、更に鏡の東北方、長軸に沿うて片側に鉄刀、轡などの馬鉄槍身が点々と遺存したのであった。するとこれもまた所謂古式古墳に通じて見るところである。

序に挙げるが、東方の相似た一つでも、その東辺から碧玉の管玉・水晶の切子玉、玻璃(はり・水晶)の小玉類が見出されて、いまもその大部分を渡辺氏が保存している。

もと西枕に伸展葬された頭辺に副葬してあつた本古鏡をはじめ他の品々に対しては、氏が保存の上で留意して、手許にとどめたが、出土を伝え聞いて訪れる好事家に依つて、それが鉄器の故でもあつたらうが、すべて氏の手から離れて、鏡なり馬具類は日田市の岡田義勇氏

の有に帰したとのことである。

従うて、鏡以外の副葬品に就いても記憶のよい渡邊氏の語るところに従うと、鉄刀は三つに折れていて、細身のあまり長くない直刀であったと見られ、また轡(くつわ)は丸形の鏡板(鑊)のもので、他に角形をした金属製品を伴うたものであった。最近同じ玉林氏が齋(もたら)したその馬具の一部と云う雲珠(うず・辻金物)二個は、中央に巻具を嵌め飾ったものである。それ等殊に辻金物の作りより見ると時代は五世紀を遡らないものである。然らば、遺跡の営まれたのは、この馬具から推される時期を遡らず、またその構造副葬品よりして特に有力者のものであったとも考えられないのである。この点からすると中国前漢時代の同種の鏡として優れたものが現実に出土したことは、鏡が造作されて此の国に舶載されてから、異域の珍宝として珍重、久しく伝世したことを物語るものであり、同時に、この優れた遺品の舶載の上に中国文物の伝来の古いことが強く意識されることである。

論文掲載後、梅原氏は国の重要文化財の指定に向け尽力したようで、1964年(昭和39)に国の指定を受け、東京国立博物館所蔵となった。

「三国志」展の開催と中国研究員による衝撃発言

そして、すでに述べたとおり、2019年(令和元)7月9日から9月16日まで東京国立博物館において「三国志」展が開催され、この機会に日中の学者による学術交流座談会が行われ、河南省文物考古研究員の潘偉斌(はん・いひん)研究員から、

「2008年に魏の曹操(155～220)の「曹操高陵」から出土した鉄鏡と、日田市出土とされる金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡が画像でみるかぎり、文様も装飾も酷似している。直径も21センチで、ほぼ同じ大きさだ」

との発言があり、マスコミによって大きく報道され、さらには10月1日から1月5日まで九州国立博物館において「三国志」展が開催されたが、潘偉斌研究員らは九州国立博物館を訪れて現物を見たうえで、

「銅鏡百枚のうちの1枚か、あるいは別ルートで入手した鏡であろう」

「金錯や銀錯が施される鏡は王宮関係に限られる。この鏡は国宝級の貴重なものであり、公式なルートで日本に伝わったと考えられる」

と述べ、これまた大きく報道された。

金銀錯嵌珠龍文鉄鏡に関する経過

年	記 事
1933年(昭和8)	日田市日高町で発見され、つまみがあったことから鏡と判断し湿気を避けるため、石炭箱に石灰と一緒にに入れて三芳小学校に寄贈
1940年代	太平洋戦争～終戦後、三芳小学校から紛失
1960年(昭和35)	京都大学教授梅原末治氏が奈良の古美術商から購入
1962年(昭和37)	天理大学付属天理博物館で白木原好美氏により研ぎ出しが行われ、金銀玉の装飾が現れる。付着の石灰からダンワラ古墳出土の鉄鏡と認定
1963年(昭和38)	梅原末治氏が美術研究誌『国華』に「豊後日田出土の漢金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡」を掲載

1964年(昭和39)	国の重要文化財に指定、東京国立博物館に収蔵される。
2006年(平成18)	12月東京国立博物館から九州国立博物館に保管替
2007年(平成19)	1月1日～1月28日九州国立博物館で展示
2009年(平成21)	10月20日～11月29日九州国立博物館で展示
2019年(令和元)	<p>・7月9日～9月16日東京国立博物館で「三国志」展 日中の学者による学術交流団座談会が行われ、河南省文物考古研究員の潘偉斌研究員から、「2008年に曹操高陵から出土した鉄鏡と、日田市出土とされる金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡が画像でみるかぎり、文様も装飾も酷似している。直径も21センチで、ほぼ同じ大きさだ」との発言があり、マスコミも大きく報道</p> <p>・10月1日～1月5日九州国立博物館で「三国志」展 中国の研究員らが九州国立博物館を訪れ現物の鏡を見る。 「銅鏡百枚のうちの1枚か、あるいは別ルートで入手した鏡であろう」 「金錯や銀錯が施される鏡は王宮関係に限られる。この鏡は国宝級の貴重なものであり、公式なルートで日本に伝わったと考えられる」と述べる。</p>

日本側の鈍い反応

このように、中国側は「金銀錯嵌珠龍文鉄鏡＝卑弥呼の鏡」を明確に表明して帰国した。

NHKはじめ各マスコミも大きく報道したが、現在では何事もなかったように静まり返っている。

令和元年9月6日に掲載された朝日新聞の「古代中国の鏡？ なぜ大分に」の見出しとともに掲載された記事を読むと、日本の考古学界の反応が見えてくる。

邪馬台国近畿説が大勢を占める状況で、九州の日田から卑弥呼の鏡が出るはずはない——そのような懐疑心がにじみ出た奇妙な記事になっている。

だが多くの考古学者はやや距離を置く。九州大学の辻田淳一郎准教授は「出土状況や遺跡の時期が不明確なため、位置づけが難しい」と話す。「中国でも最高級の鏡が日田地域で出土したことの説明が困難で、もしダンワラで出土したとするなら、近畿などの別の土地に当初持ち込まれたものが、日田地域に搬入された可能性が考えられる」とみる。

。華麗さでは随一と多くの考古学者が太鼓判をおす古の鏡がある。「金銀錯嵌珠龍文鉄鏡」。大分県日田市で戦前に見つかったものとされ、装飾の巧みさから1964年に重要文化財に指定された。由来を含め多くの謎が残るこの鏡が、三国志の英雄・曹操の墓から出土した鏡とほぼ同じ型式である可能性が高まっている。「皇帝の所有物にふさわしい最高級の鏡」がなぜ九州に——。研究者らは首をかしげる。

近畿説を前提に考えるから「首をかしげる」ことになるし、「近畿など別の土地に当初持ち込まれたものが、日田地域に搬入された可能性」などという、まったくピント外れのコメントとなる。

しかも、奇妙なことに九州説の重鎮ともいえる高島忠平氏が、近畿説論者に転向されたかのようなコメントを出されている。高島氏の論を突き詰めていけば、そもそも厳重な審査を経て決定されたはずの国の重要文化財の指定が誤りであったとする論といわざるを得ない。

佐賀女子短期大学の高島忠平名誉教授は「ダンワラ古墳の出土品ではないのでは」と指摘する。梅原の下で鏡を研磨した白木原和美・熊本大学名誉教授が今年、ある研究者の追悼文集に寄せた文章などが根拠だ。ダンワラの鏡について、立ち会った人は石灰と一緒に須恵器に入れたと話したという。須恵器に入る程度の小さい鏡であることなどから、21センチもある金銀錯嵌珠龍文鉄鏡とは別の鏡だった可能性を示唆したという。高島名誉教授は「出土地について古美術商が言うことは必ずしもあてにならない。あの鏡を邪馬台国九州説の証しと考えるのは厳しい」。

中国の研究員は、2008年に「曹操高陵」から出土した鉄鏡と金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡が酷似し、直径も21センチでほぼ同じであることから、「金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡＝卑弥呼の鏡」と表明したことが本質的な問題である。

九州説につながりかねない中国の研究員の発言を喜ぶどころか、日田出土に疑問を投げかけることに終始する高島氏の発言は、きわめて異様というしかない。

国の重要文化財の指定は、決して軽いものではないはずである。高島氏の発言は、国の重要文化財指定そのものに対するきわめて重大な不信表明に他ならない。客観的で明白な証拠を示して指定の取り消しを求めるべきではないか。

いずれにしろ、近畿説が大勢を占める学界の反応としては、近畿から遠く離れた日田市から卑弥呼の鏡が出ること自体不可思議で、かつ、その出土状況などにもうさん臭いところがあるので、中国研究者の発言に対して「寝た子を起こすな」というような苦々しい気分であったろうことは疑いない。いまではマスコミの関心もすっかり薄らぎ、金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡の存在は再び忘れ去られている。

近畿中心史観に対する懸念

この際、筆者が常々感じている大きな懸念を記しておこう。

いつの日か、あるところで親魏倭王の金印ないしそれに類する物が発見されても、その出土地が近畿以外であった場合、「近畿に邪馬台国はあった。したがって、それは近畿から授与したものである」という「近畿中心史観」に基づく「授与説」で処理されてしまう懸念である。

考古学上の大発見が、こうして近畿に奪われ、あるいは難癖をつけて抹殺されていく。

そのような事態になることを心から憂慮している。

金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡はその先駆的事例なのではあるまいか、と懸念している。

さらにいえば、近畿以外の地域で見つかった重要な遺跡・遺物が不当に軽視、無視されていることに対する懸念である。

九州説に立脚すれば、それを補強してくれるきわめて重要な遺物であるにもかかわらず、近畿説に立脚すれば、単なる田舎の出土品に過ぎない。考古学上の大発見にもかかわらず、軽視・無視されて歴史の舞台から消されてしまう。——そのような懸念を抱いたことがある。

いくつか事例を列挙することもできるが、煩雑になるので別の機会に譲りたい。

邪馬台国の暫定首位に躍り出た日田

季刊「古代史ネット」の創刊号の「卑弥呼の鏡」のなかで、

「金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡が卑弥呼の鏡であるとすれば、卑弥呼が日田を拠点とした可能性もあり得よう。卑弥呼を継承した台与の可能性もあり得よう。そうではないにしても、卑弥呼あるいは台与、邪馬台国から特別の信任を受けた人物が、久津媛であった可能性もあり得よう。いずれにしても、金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡が卑弥呼の鏡とした場合、邪馬台国九州説が飛躍的に進展する可能性を秘めている」

と述べたが、いまでもこの気持ちに変わりはない。

そのとき、金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡は、

① 卑弥呼の鏡 ② 台与の鏡 ③ 邪馬台国から信認を受けた人物、例えば久津媛の鏡のいずれかであろう、と述べた。

「親魏倭王の金印など、卑弥呼や邪馬台国と直接結びつく遺物や文書など、決定的な資料の出土」をもって邪馬台国の判定基準にしている筆者からみれば、日田の金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡は、現時点におけるきわめて有力な物証と言わざるを得ない。

上記の①②であれば、日田は邪馬台国の拠点、③であれば邪馬台国に属する地域ということになる。

いずれにしろ、金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡によって、日田は邪馬台国を論じるうえで欠くことのできない地域になったといえる。いや、邪馬台国候補の暫定1位に躍り出たといっても過言ではない。

もちろん、梅原論文に書かれた経緯・内容についての信頼性が前提条件であり、将来梅原論文に瑕疵があったとする明白な理由が生じた場合や新たな発掘によって別場所が邪馬台国の有力候補に浮上した場合などにおいては、この暫定的な順位が動くのは当然のことである。

いつ、だれが金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡をもらったのか

この際、金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡に関して、いくつかの点を整理しておこう。

まず、この金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡が中国の皇帝から、いつ、だれに授与されたかということである。邪馬台国の卑弥呼と後継者の台与は、次のとおり中国に使者を派遣している。

回	時期	日本	中国	使者	贈呈品	出典
①	景初三年 (239)12月	卑弥呼	魏 (洛陽)	大夫・難升米 副使・都市牛利	男生口四人・女生口六人 斑布二匹二丈	魏志
	正始元年 (240)7月			帰国 帯方郡建中校尉・梯儻 (ていしゅん)が来訪	<卑弥呼に対して> 親魏倭王の金印・紺地句 文錦三匹・細班華罽五 張・白絹五十匹・金八両・ 五尺刀二口・銅鏡百枚・ 真珠五十斤・鉛丹五十斤	魏志
②	正始四年 (243)12月	卑弥呼	魏 (洛陽)	大夫・伊声耆 副使・掖邪狗 随行団員・6人	生口 倭錦・絳青縑・帛布 丹木拊短弓・矢	魏志
	正始五年 (244)			帰国	<返礼品>記載なし①	魏志
③	正始八年 (247)	卑弥呼	魏 (帯方郡)	戴斯(さし)・烏越(あお) 狗奴国と戦闘状態になっ たことを報告。帯方郡は塞 の曹掾史・張政らを派遣	正始六年(245)の皇帝の 詔書と黄幢を難升米に 授与し檄文を發す。	魏志
④	正始九年 (248?)	台与	魏 (帯方郡) (洛陽)	大夫卒善中郎將・掖邪狗 ら二十人を随行させ、張政 らを帯方郡へ送り、洛陽に 至る	男女生口三十人 白珠五千孔 青大句珠二枚 異文雜錦二十四	魏志
	正始十年 (249?)			帰国	<返礼品>記載なし②	魏志
⑤	泰始2年 (266)	台与	西晋 (洛陽)	<獻上品>記載なし		晋書 起居注
	泰始3年 (267?)				<返礼品>記載なし③	

景初三年(239)に卑弥呼が派遣した第一回の使者たちが中国から授与された品々は細かく記されており、しかもそのなかに「銅鏡百枚」と記されている。

中国が金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡というきわめて特別の品を下賜したとすれば、当然独立して記したはずである。そうでないということは、このとき授与されていないのであろう。

正始八年(247)にも、卑弥呼は帯方郡に使者を派遣した。狗奴国と戦闘状態になったことを緊急に報告するためのものであった。

これを受けて、帯方郡は塞の曹掾史・張政らを派遣するとともに、正始六年(245)に下された皇帝の詔書と黄幢を難升米に授与し、檄文を發した。この場合も、鉄鏡については記されていないし、第一、そのような悠長な状況でもない。これまた除外すべきであらう。

中国は、外国からの使節に対して、過大ともおもえる返礼品を授与するのが常例である。

しかしながら、その場合においても、中国の正史において返礼の品々を細かく記載することは稀である。ということは、返礼品がまったく記されていない上表の①、②、③の時期が逆に怪しいということになる。

卑弥呼の生存中でみれば、①の正始四年(243)の使者派遣のときに限られる。

後継者の台与であれば、②の正始九年(248)と③の泰始2年(266)のいずれかに絞られる。

このなかから、一つを選別することはきわめて難問であるが、強いていえば、日田が豊後——「豊(とよ)」に属することを考慮に入れるべきかもしれない。

台与が拠点とする地域であるがゆえに豊(とよ)の国と呼ばれたのではないか。日田は豊の国に属する。新しく女王となった台与は、豊の国の日田を拠点にしていた可能性がある。

魏の皇帝は、正始九年(248)ごろ新たに邪馬台国の女王となった台与に対して、その就任祝いとして金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡を特別に授与したのではないか。——よって日田から出土した。

あえていえば、台与の鏡である可能性があるというのが、現時点における——あくまで現時点における、筆者のたどりついた暫定的な結論である。

金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡とともに出土したとされる遺物

この際、金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡と一緒に出土した遺物といわれるものについても紹介しておこう。

梅原論文には、

「即ち長さ四・五メートルもあつたろうと言う細長いこの部分は、周囲とやや土質が違つて、自から所謂古式古墳(竪穴式)の主体たることを示すもので、鏡はその西辺に近く完形を保つて遺存、更に鏡の東北方、長軸に沿つて片側に鉄刀、轡などの馬鉄槍身が点々と遺存したのであつた。するとこれもまた所謂古式古墳に通じて見るところである。

序に挙げるが、東方の相似た一つでも、その東辺から碧玉の管玉・水晶の切子玉、玻璃(はり・水晶)の小玉類が見出されて、いまもその大部分を渡邊氏が保存している」と書かれている。

金錯鉄帯鉤

大塚初重編『日本古墳大辞典』(東京堂出版)には、

「大分県日田市大字日高字東寺、ダンワラと通称する日田盆地南部の丘陵の西裾にあつたという。1933年(昭和8)国鉄久大線の敷設工事に伴つて発見されたと伝えるこの古墳の実態は現在不詳であるが、工事に際して採集された鏡は、金銀錯の手法で虺龍文等表現し、随所に珠玉を嵌入した鉄鏡で、本邦唯一の出土例として、著名である。同時に鉄刀・轡等が出土したとも伝える。ほかに伝日田市刃連町出土と称する金錯鉄帯鉤も共伴遺物とみられている」

と書かれている。



金錯鉄帯鉤(長さ 23.6 センチ)



金錯鉄帯鉤(長さ 7.7 センチ)



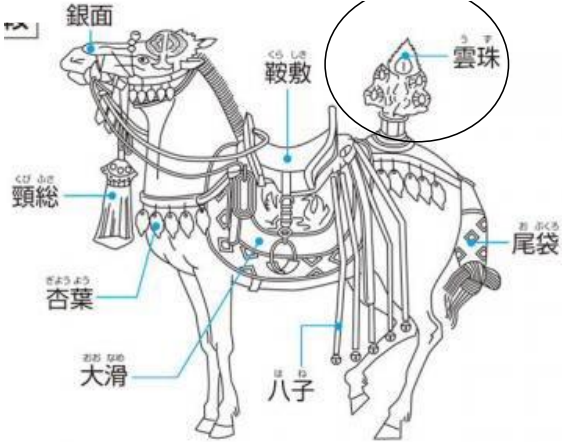
帯鉤(たいこう)とは、春秋戦国時代から漢代にかけて流行した腰帯の留め金具、すなわち「帯どめ」のことで、英語の「belt hook(ベルト・フック)」あるいは「buckle(バックル)」に当たる。

中国の春秋戦国時代から漢の時代に流行した。素材としては、青銅製や鉄製のものが多く、骨製や玉製もあるという。細長い琵琶状や棒状の一端を鉤(かぎ)状に曲げた形が多く、象嵌などを施した豪華なものもある。日田出土とされる帯鉤も金象嵌が施されている。

大小二個の帯鉤は個人所蔵であったが、東京国立博物館に寄託され、九州国立博物館に保管されているようである。

鉄の腐蝕の状態や金錯の技法からみて金銀錯嵌珠龍文鉄鏡と関連があるものとみられている(賀川光夫「金銀錯嵌珠龍文鉄鏡」)。

金銀錯嵌珠龍文鉄鏡とともにダンワラ古墳から出土したとされる遺物

遺物	出土	説明
金銀錯嵌珠龍文鉄鏡 (東京国立博物館)	西	ダンワラ古墳(日高町)。帯鉤、鉄刀、雲珠・轡などの馬具とともに出土したとされる。
金錯鉄帯鉤 (九州国立博物館)	—	伝ダンワラ古墳。ただし刃連町出土と伝わる。 細長い舌状。表面を蒲鋒状に整え、全体に金象嵌。  長さ 23.6 センチ
金錯鉄帯鉤	—	伝ダンワラ古墳。ただし刃連町出土と伝わる。 軸部と飾部からなり、飾部は丸みのある三角形。全体に金象嵌  長さ 7.7 センチ
貝製雲珠(うず) (所在不明)	西	渡辺音吉氏「鉄刀、轡(くつわ)などの馬鉄槍身が点々と遺存」 巻貝をはめ込んだ雲珠(辻金物) 2 個。 梅原氏は 5 世紀と推定 
鉄刀(所在不明)	西	三つに折れていた。細身のあまり長くない直刀
轡(所在不明)	西	丸形の鏡板(鏤)
碧玉製管玉(所在不明)	東	渡辺音吉氏保存
水晶製切子玉(所在不明)	東	渡辺音吉氏保存
水晶製小玉(所在不明)	東	渡辺音吉氏保存

まとめ

今回の連載は、上垣外憲一(元大手前大学教授)氏の『古代日本謎の四世紀』(学生社、2011年刊)の一節を紹介して終えることにしよう。

上垣外憲一氏は、金銀錯嵌珠龍文鉄鏡が卑弥呼の鏡にふさわしい鏡であることをきわめて率直に表明されている。

私は、「親魏倭王」と刻まれた金印でも出ない限り、卑弥呼の墓は確定できない、と書いた。「青龍三年鏡」方格規矩鏡のようなものであれば、百枚の魏鏡をもらった卑弥呼であれば、魏鏡がざくざく三十枚以上でてほしいところである。

ところが、そうした私が写真を最初見た瞬間に、卑弥呼にふさわしい魏皇帝からの贈り物は、このようなものだったに違いないと思った遺物がただ一つある。魏の皇帝から「倭国の主だった皆さん(豪族の長たち)」に送られたのではなく、その上に一段も二段も高く君臨する女王にふさわしいとして、卑弥呼その人に、ただ一つ贈られた、「卑弥呼宛の鏡」にふさわしい鏡が現実存在するのである。それが、口絵に掲載した大分県日田のダンノワラ古墳出土と伝えられる、「金銀錯嵌(さくがん)珠龍文鉄鏡」である。

この種類の鏡で中国の文献に載るのは魏の曹操が献帝に献上した(太平御覧卷七百十七)と伝えられ、金錯鉄鏡とよばれる大型鏡である。何より、その豪華な材料、そうして皇帝の御物でなければ、とうていこのような優美繊細にして精密な模様を、職人たちが精魂込めて作り上げることがないだろう。その細工の出来ばえが、たとえようもなく素晴らしい。曹操の金錯鉄鏡は「尺二寸」と伝えられ、当時(後漢から三国)の尺度で二十九センチを数える大型のものだった。このダンノワラ古墳出土の金銀錯鉄鏡は二十二センチ、すなわち九寸であり、四分の三の大きさである。そのまま魏の皇帝と、「親魏倭王」の格式の差に対応すると私は思う。

纏向遺跡付近から、あれほど丁寧な発掘作業が行われているのに、我国の製造と特定できる鏡は、付近の古墳を含めて一つも出土していない。仮に、纏向古墳群の一つ、つまり卑弥呼の没年に近いと思われる、纏向石塚、ホケノ山等の古墳から、このような後漢末の製作か、と思われる豪華絢爛たる鏡が出ていけば、私もかなり邪馬台国奈良県説に傾くだろう。

(以下、次号へつづく)

河村哲夫(かわむら・てつお)

福岡県柳川市生まれ
九州大学法学部卒
歴史作家、日本古代史ネットワーク副会長
福岡県文化団体連合会顧問
ふくおかアジア文化塾代表
立花壱岐研究会会員
元『季刊邪馬台国』編纂委員長
西日本新聞 TNC 文化サークル講師
朝日カルチャーセンター講師
大野城市山城塾講師



〈おもな著作〉

- 『志は、天下～柳川藩最後の家老・立花壱岐～(全5巻)』(1995年海鳥社)
「小楠と立花壱岐」(1998年『横井小楠のすべて』(新人物往来社)
『立花宗茂』(1999年、西日本新聞社)
『柳川城炎上～立花壱岐・もうひとつの維新史～』(1999年角川書店)
『西日本古代紀行～神功皇后風土記～』(2001年西日本新聞社)
『筑後争乱記～蒲池一族の興亡～』(2003年海鳥社)
『九州を制覇した大王～景行天皇巡幸記～』(2006年海鳥社)
『天を翔けた男～西海の豪商・石本平兵衛～』(2007年11月梓書院)
「北部九州における神功皇后伝承」(2008年、『季刊邪馬台国』97号、98号)
「九州における景行天皇伝承」(2008年、『季刊邪馬台国』99号)
「『季刊邪馬台国』100号への軌跡」(2008年、『季刊邪馬台国』100号)
「小楠と立花壱岐」(2009年11月、『別冊環・横井小楠』藤原書店)
『龍王の海～国姓爺・鄭成功～』(2010年3月海鳥社)
「小楠の後継者、立花壱岐」(2011年1月、『環』藤原書店)
『天草の豪商石本平兵衛』(2012年8月藤原書店)
『神功皇后の謎を解く～伝承地探訪録～』(2013年12月原書房)
『景行天皇と日本武尊～列島を制覇した大王～』(2014年6月原書房)
『法頭の旅・ブッダへの道』(2012～2016年『季刊邪馬台国』114号～124号に連載)

(テレビ・ラジオ出演)

- 平成31年1月NHK「日本人のおなまえっ！ 金栗の由来・ルーツ」
平成28年よりRKBラジオ「古代の福岡を歩く」レギュラー出演